

経営一転語 63 経営計画書は魔法の書

「経営計画書」は非常に大事なものです。経営計画書は、ビジネスプランとか、事業計画書とか言い方は様々ですが、本質は同じです。

この経営計画書の大事さは何ものにも代えがたいものがあります。しかし、ほとんどの中小企業は作っていません。なぜなら、どれほど効果があるか、実感が湧かないからだと思います。

経営計画書の作成効果は様々ありますが、今回は、主に金融機関との関係から経営計画書の大事さを説明いたします。

金融機関は、現在も護送船団方式という慣習から、なかなか抜け出せませんが、将来的には「担保融資」（担保があるから貸す）から「プロジェクト融資（ビジネスプラン融資）」（経営や事業の将来性を期待して貸す）へと方向転換するでしょう。

つまり、今までは「土地や保証人などの担保があれば貸す」ということが主流でしたが、今後は「担保がなくても経営計画や事業の将来性を見て貸す」時代がもうすぐそこまで来ているということです。

金融機関のビジネスモデルは、お金を集めて（預金獲得）、そのお金をどこかに貸して（貸し付け）その利ざやを稼いでいます。ということは、お金を貸さない生きていけません。それが金融機関の本質です。

金融機関は常にお金を貸す先を探しています。昔は土地神話がありました。土地が値上がりすることが前提でした。担保さえあれば貸してくれていました。

これは、実は知恵がない貸し付けです。なぜなら、企業の経営計画の将来性を目利きしていないからです。

金融機関は安全なところに貸したいと思っています。都銀も地方企業に触手を伸ばしてきています。お金を貸さなければ銀行もつぶれます。

金融機関は、何を知りたいかという、やはり、会社の将来計画、社長の考え方や経営哲学、将来の経営計画を見たいというのが本音でしょう。

金融機関（場合によっては複数）に1時間から2時間かけて、自分の考えを説明できるでしょうか。なかなかできることではありません。

だから、金融機関も会社の社長の考え方や経営哲学、将来計画が理解できる経営計画書を必要としているのです。

商売は相手のニーズに応えるのが原点といますが、経営計画書は、金融機関のニーズに応える一つの大切なツールとも言えましょう。

経営計画書がある会社とない会社、どちらに金融機関はお金を貸しやすいかということでもあります。そういう意味でも、経営計画書は非常に大事なもののなのです。